HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	小川未明と日本少国民文化協会 ： 日中・「大東亜」戦争下の歩み
Author(s)	増井, 真琴
Citation	研究論集, 17, 15（右）-30（右）
Issue Date	2017-11-29
DOI	https://doi.org/10.14943/rjgsl.17.r15
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/67986
Type	departmental bulletin paper
File Information	17_013_masui.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

10.14943/rjgsl.17.r 15

小川未明と日本少国民文化協会

――日中・「大東亜」戦争下の歩み――

増井真琴

要旨

日本少国民文化協会（以下、少文協）は、日米開戦直後の昭和一六年一二月二三日（皇太子の誕生日）に発足した、児童文化分野の国策協力団体である。そして児童文学作家の小川未明は、この団体の設立・運営に深い関わりを持っていた。

しかるに、未明と少文協との接点をつまびらかにした先行研究は、現状存在しない。というのも、昭和期の未明の行状自体、これまであまり注目されてこなかったからである。なかんずく、満州事変以降、一五年戦争下のそれは、研究の空白地帯とさえ言ってよいだろう。

そこで本稿は、研究の更地に一石を投じるべく、次の三節からなるアプローチを採用し、両者の関係の究明を試みた。

まず、一節「「児童読物改善ニ関スル指示要綱」から日本少国民文化協会設立まで」では、少文協発足の起点である「児童読物改善ニ関スル指示要綱」（昭和一三年一〇月）から、「児童文化新体制懇談会」（昭和一五年九月）を経て、少文協設立（昭和一六年一二年）へ至るまでの未明の行状を、一次資料を探査して、徹底的に洗った。

次に、二節「日本少国民文化協会での発言・行動」では、少文協設立後、団体の機関誌類（「少国民文化」「少国民文学」「日本少国民文化協会報」『少国民文化論』）へ発表された、未明の評論・随想類をすべて分析するとともに、協会内部での彼の行動を追った。

最後に、三節「童話「頸輪」――アジアを統べる母」では、未明が「少国民文化」創刊号へ著した童話「頸輪」（昭和一七年六月）を分析した。童話作中の小犬と母犬には、欧米に屈従を強いられるアジアと、その解放者たる日本の姿――すなわち、「大東亜共栄圏」のイデオロギー――が存分に仮託されているというのが、筆者の見立てである。

本稿によって、従来黙殺されてきた、未明の国策協力者としての相貌が、幾分なりとも明らかになったものと結論付けたい。

はじめに

日本少国民文化協会は、日米開戦直後の昭和一六年一二月二三日（皇太子の誕生日）に発足し、総則に「本会ハ皇国ノ道ニ則リ国民文化ノ基礎タル日本少国民文化ヲ確立シ以テ皇国民ノ錬成ニ資スルヲ目的トス」（「設立趣意書・定款並諸規定」）と定める、児童文化分野の国策協力団体である。翌昭和一七年二月一一日（紀元節）、情報局講堂で開催された発会式へは、時の東条英機首相や谷正之情報局総裁が参列し、祝辞を述べるほど、政府も肩入れする団体だった。そして小川未明は、この団体の設立・運営に深い関わりを持っていた。

しかるに、未明と少文協との接点をつまびらかにした先行研究は、現状存在しない。というのも、昭和期の未明の行状自体、これまであまり注目されてこなかったからである。なかんずく、満州事変以降、一五年戦争下のそれは、研究の不毛地帯とさえ言ってよい[1]。

未明研究史における、かかる惨状は何故生まれたのか。大きく三つの理由が挙げられよう。一つは、未明の代表作が大正期に集中しているため昭和期への関心が比較的薄かったこと[2]、二つは、「日本児童文学の父」のあられもない「戦争協力」が無視ないし隠蔽の対象となっていたこと[3]、三つは――前二項とも密接に関連するが――書誌が未整備だったことである[4]。この内、一・二については研究者の怠慢（あるいは限界）。三に関しては、近年小埜祐二が、書誌本『小川未明全童話』（日外アソシエーツ、平成二四年一二月）、『小川未明Ⅱ　全小説・随筆』（同上、平成二八年六月）を著し、状況は飛躍的に改善しつつある[5]。

本稿は、少文協誕生の起点である、「児童読物改善ニ関スル指示要綱」（昭和一三年一〇月）以来、未明が少文協の設立にどのようなかたちで関わり（**一節**）、協会内部でどのような言動を取っていたのか（**二節**）、また童話を紡いでいたのか（**三節**）、その全容を明らかにすることを目的とする。射程に入れる期間は、少文協が解散（昭和二〇年一〇月）するまでの、おおよそ七年あまりだ。それはすなわち、日中戦争・「大東亜戦争」下の未明の足跡の一端を、跡付ける作業に他ならない。小埜の労作の助けを借りながら、研究の更地に、一石を投じたい。

一、「児童読物改善ニ関スル指示要綱」から日本少国民文化協会設立まで

小川未明は、日本少国民文化協会の設立に、どのようなかたちで関わっていたのか。本節では、関係資料を紐解き、両者の関連を明らかにしたい。

少文協の起源は、昭和一三年一〇月の「児童読物改善ニ関スル指示要綱」（「出版警察資料」昭和一三年八・九・一〇月合併号）にあると言われている[6]。これは内務省警保局図書課の佐伯郁郎が中心に取りまとめた文章で、児童読物を扱う出版社に対し、各種改善を

命じる指示書だった。

具体的には、「附録（オマケ）」「卑猥ナル挿画」「内容ノ野卑、陰惨、猟奇的ニ渉ル読物」などを、「廃止スベキ事項」として、「日本精神ノ確立ニ資スルモノタルコト」「生産ノ知識、科学知識ヲ与ヘルモノヲ取入ルルコト」「日支ノ提携ヲ積極的ニ協調スルヤウ取計ラフコト」などを、「編集上ノ注意事項」として、それぞれ挙げている。浅岡靖央は、「戦争政策としての少国民文化」（「子どもの文化」平成二二年七・八月）で、廃止事項については「これが国家からの指示であることを度外視すれば、むしろ良識的と言えるものがほとんどである」と評価する一方、注意事項については「国民精神総動員の趣旨は相応に盛り込まれている」と、「国民精神総動員実施要綱」（昭和一二年八月）および「国家総動員法」（昭和一三年三月）下の、挙国一致体制の影響を指摘している[7]。

佐伯は、要綱を作成するにあたって、九名の児童文学作家・研究者・教育者に協力を依頼した[8]。未明、坪田譲治、百田宗治、山本有三、城戸幡太郎、波多野完治、佐々木秀一、西原慶一、霜田静志の九人である。未明の答申書は次のようなものだ。

児童教化によつて、社会の矛盾を除去し、善美の国家を建設したいと思ひます。国家の力にて、児童にとりて、有害なるものを除き、健全な教化に邁進したならば、今後十年にして日本精神を体得した立派な国民が養成されることによつて面目を一新するでありませう。私は善い世の中を造ることがせめて戦争に犠牲となつた幾百万の霊を慰める唯一の途であると考へてゐます。先ず最も今日の社会の悪趣味を反映した夥しい赤本類の絶滅です。そこには何等の高き理想がありません。

「児童雑誌に対する理想案」（「出版警察資料」昭和一三年七月）

ここで未明は、「善美の国家を建設」するという観点から、国家が出版物へ統制を加えることに、諸手を上げて賛成している。引用文で言及している「赤本類の絶滅」の他に、彼は「おまけといふものの廃止」や「敬神、忠孝、仁義、友愛、誠実、同情、憐憫、自己犠牲、協力奉仕等の日本精神の確立」も進言しているが、これらはいずれも、要綱の文面に反映されている点が確認できよう[9]。

また内務省は、書類での「指示」のみならず、強硬策にも打って出た。この年の九月から一二月にかけて、漫画三〇数種を発売禁止処分、絵本三種を削除処分に付したのである[10]。さらに内務省は、要綱の理念を徹底させるため、出版業者・編集者の組織的編成を試みる。すなわち、日本児童絵本出版協会（昭和一三年一一月）、関西児童絵本卸業協会（昭和一四年四月）、青葉会（昭和一四年五月）といった団体を、内務省斡旋のもと、新設させたのである。

他方、文部省は、昭和一四年五月、図書推薦制度を児童書の分野にまで拡大。良書の普及を目指した。かくして、内務省が主導する児童図書の浄化措置は一定の進展を勝ち取ったわけだが、佐伯の回顧録「日本少国民文化協会の設立まで」（「新児童文化」昭和一七年五月）によれば、これは必ずしも満足のいく内容ではなかったとい

う。というのも、内務省の業者指導は「徒らに追従するか、内心の狼狽を押しかくして傍観するかの何れか」を生むに過ぎなかったし、文部省の図書推薦は「既刊の図書に限定される」ゆえ、「皇国民育成上から必要とする図書を、業者の自由裁量を超えて積極的に出版せしめるといふことは、この制度を以てしては不可能」だったからである。

そんな中、昭和一五年七月、第二次近衛文麿内閣が成立し、新体制運動が叫ばれるようになると、児童文化の領域でも、強力かつ一元的な指導機関樹立の機運が高まっていく。昭和一五年九月三〇日には、佐伯、未明、百田宗治、山本有三、城戸幡太郎、波多野完治、阪本越郎の七名が発起人となり、神田如水会館で、「児童文化新体制懇談会」を開催。三〇人余りが参加した、この異様に出席者の多い懇談会で、未明は児童文化界の一致結束を訴えた。

私は児童文化に携はるものは皆が新しい出発点にかへり力を合せてその健全な発展を図るべきだと兼ね兼ね考へてゐた。現在の如き多種多様な団体の分立、混乱を極める無組織は自由主義社会の残滓に過ぎない。旧体制下においてはそれでもよかつたであらうが今はも早許されない。私達の新体制確立は一刻を争ふ要請である。新体制の精神に徹してこの際各団体は即時一斉に解消して新しい一つの組織の下に結集し、我々に課せられた大きな使命の達成に捨身邁進すべきである。幸いに今日は各方面の指導的な人々が集つてゐる。ここで我々が協心戮力（りくりょく）して相図れば必ずや立派なものが作れると考へます。

（「座談会　児童文化の新体制」「日本読書新聞」昭和一五年一〇月五日）

児童文化界における「多種多様な団体の分立」は、「自由主義社会の残滓」であり、「各団体は即時一斉に解消して新しい一つの組織の下に結集」すべきだというのが、未明の主張だ。波多野がまとめた当懇談会の結論（「一、各種児童文化団体の大同団結は必須の大前提である」「一、各部門を共通一貫した指導理念の確立闡明が必要である」「一、如何に困難でも絶対にやり遂げねばならぬ」）も同様であり、一同その進路へ、舵は切られた。

昭和一五年一〇月、大政翼賛会が発足すると、その文化部が、この組織化を担当することになる。同年一二月二四日には、翼賛会本部へ関係者を集め、「日本児童文化協会（仮称）創立準備懇談会」を主催した。翌昭和一六年三月以降は、情報局に職務の管轄が移ったけれど、六月一〇日、「日本児童文化協会設立要綱案」を確定、八月一日、設立連絡会を開催、八月一三日、未明を含む創立委員七九名が決定、八月一八日、第一回創立準備委員会を開催と、新団体設立へ向けた手筈は、着実に整えられていく。

八月の二つの会合に関して、前述の佐伯文書「日本少国民文化協会の設立まで」には、「次いで、小川未明、村岡花子、山田徳兵衛氏等の少国民文化各分野の代表者十一名の協会設立に関する要望が述べられ」（八月一日）、「この委員会では、小川委員の発言によつて実

行委員、分科委員の詮衡が当局に一任され」（八月一八日）と記述があるから、未明は新団体の運営に対して、意欲的な提言を行っていたようだ。八月一日には、「協会は協会の利益を計る利益団体でなく真に国家のための団体とならねばならぬ」（「児童文化に衆知　各界から意見を聴く」「朝日新聞」昭和一六年八月二日）と、国家の利益を最優先する旨の発言も行っている。なお、この八月の段階で、山本有三の提起により、「日本児童文化協会」から「日本少国民文化協会」への名称変更が、おおむね決定した[11]。

滑川道夫の回想にも注目したい。少文協の文学部会幹事を務めた滑川は、設立準備会での未明の様子を、次のように書き記している。

> 少国民文化協会設立の会合などでしばしば目撃したところであるが「われわれ日本人は、この非常時局にあたつて……」と卓を叩かんばかりに愛国的熱情を吐露して少国民文化建設を叫んでゐる氏の姿は、実に国民生活童話建設の先駆者といつた感銘を与へる。明治の小波氏に対比すべき童話の先覚者であり先駆者であり得たばかりでなく、今なほあくことなき前進に前進を続けようとする意欲は、全くたくましきかなである。
>
> 滑川道夫『少国民文学試論』（帝国教育会出版部、昭和一七年九月）

少文協が設立された昭和一六年時点で、未明は五九歳。還暦直前ながら、血気盛んであり、「愛国的熱情を吐露して少国民文化建設を叫んで」やまなかったようだ。確かに、この時期の彼の座談会に目を通すと、「他の生長すべき部分を犠牲にして、今の日本のために尽して行くならば、それを信じて行くのが正しいと教へるのが、今の児童文化ぢやないかと思ふんです」（「座談会　児童文化の建設」「公論」昭和一五年一一月）などと発言しており、戦時下とは言え、児童を国家奉仕へ導くことにためらいがない。

また、少文協の庶務幹事を務めた二反長半も、戦後、少文協設立時の未明のエピソードを、著書に綴っている。二反長はある日、佐伯に速達で呼び出され、未明を新団体の隊列へ加えるよう、要請を受けたらしい。児童文学界の権威である未明を神輿として担ぐためだ（「君、大事業をやってくれんか。（中略）大御所の日本的童話の小川さんをひき出して旗をあげるんだ。児童文化団体の統合をやる」傍点引用者）。

早速、二反長が高円寺の未明邸へ赴き、依頼したところ、未明はすこぶる乗り気だったという。

> 君、君、これは、今、日本は大変な戦争をしているのだから文学者といっても、見物しているわけにはいかないよ。新体制によった統合団体をつくること、これはぜひやらなければいかん。わたしは大賛成だ、佐伯さんにそう伝えてくれ。もちろん君の少年文芸懇話会も解消ということになろうし、童話作家協会、それからも一つあったな。加藤武雄、吉田甲子太郎らの少年少女作家画家協会、この三つが合併すれば、ほかは問題でない。

が、童話作家協会がどうかな。

二反長半『児童文学の展望』（大阪教育図書、昭和四八年八月）

この発言は、先に紹介した「座談会　児童文化の新体制」での発言と同趣旨であり、この時期、未明が、児童文化団体の統一に情熱を燃やしていた事実がよくわかる[12]。「しかし、先生の意気込みがすごいので、ほんとに私はおどろいた」「が、ともかく、私は小川先生の意気込みにうたれた」と、二反長は当時の心境を回想している。

未明の力添えもあり、昭和一六年末、日本少国民文化協会は無事産声を挙げた。「児童読物改善ニ関スル指示要綱」（昭和一三年一〇月）から、「児童文化新体制懇談会」（昭和一五年九月）を経て、少文協建設へ至る過程で、未明は佐伯ら行政官僚と積極的に連携し、児童文化を統制する側に回っていたのである。二反長の挿話から窺い知れる通り、ある面、未明の社会的影響力を知悉した役人に、利用されていた側面も否定できないだろう。

二、日本少国民文化協会での発言・行動

それでは、自らも一肌脱ぎ、創建した日本少国民文化協会で、小川未明はどのような言動を取っていたのだろうか。本節では、この点をつまびらかにしたい。

まず、少文協の組織と事業について、あらましを述べる。冒頭「総則」を引いた通り、この団体は、「皇国ノ道」に則った「少国民文化」の確立を通して「皇国民ノ錬成」を目指す社団法人で、主管官庁は情報局と文部省。銀座三越百貨店の六階に事務所を構え、最盛期は一〇〇名超の職員と、約二〇〇〇名の会員を抱えていた[13]。まさしく、「戦中において唯一存在を許された公的な児童文化団体」（浅岡靖央「１９４０年体制の児童文化」「別冊　子どもの文化」平成一八年七月）に他ならない。

主事業は、大きく分けて二つある。一つは、「少国民文化財」の統制だ。少文協には、文学、絵画、童話、遊具、紙芝居、舞踊、音楽、出版、演劇、映画、蓄音機レコードの一一部会（のちに遊具から生活用品が分離して一二部会）があり、これらのジャンルの創作物および創作者を「皇国ノ道」、すなわち「大東亜戦争」遂行へ資するよう教導することが、「設立趣旨の眼目」（小野俊一理事長「日本少国民文化協会の使命」「少国民文化」昭和一七年六月）だった[14]。しかし、実際、配給を統御する権限は、紙芝居以外得られない。日本出版文化協会や日本玩具統制協会といった他の統制機関に、その権限を先取りされていたからである。

二つは、各種イベントの開催だ。「大東亜少国民大会」（昭和一七年一二月）、「全国少国民「ミンナウタヘ」大会」（昭和一七・一八年一一月）といった戦意高揚を煽る催し物や、「少国民向きよい本の選び方展覧会」（昭和一七年四・六月）、「戦時下の玩具与へ方展覧会」（昭和一八年二～三月）といった良質の「少国民文化財」を紹介する展示会が、それに当たる[15]。だが、戦局悪化に伴い、昭和一九年以降は、挺身隊による就業先・疎開地への児童慰問が、もっぱらとなっ

た。

さて、少文協には「少国民文化」「少国民文学」「少国民文化協会報」という定期刊行物が存在し、未明はこれら全誌へ寄稿している。「少国民文化」は少文協の中央機関誌[16]。編集長は、百田宗治（後に内田克己）が務めた。昭和一七年六月から同一九年一二月までの間、計三〇冊刊行されている。佐伯郁郎「機関誌「少国民文化」について」（「日本少国民文化協会報」昭和一八年一月一五日）によれば、売れ行きはあまり芳しくなかったようだ[17]。この内、未明は創刊号に童話「頸輪」を、昭和一八年八月号に感想「母は祖国の如し」を寄せている[18]。前者の分析は次節へ譲り、ここでは後者の内容を検討したい。

「母は祖国の如し」は母性賛美の一文である。我が子のために犠牲的に尽くす母のエピソード（おかずの魚をあげる、夜鍋で子の靴下を縫う等）を縷々紹介した後、未明は次のような言葉で文章を締めくくる。

> かうして、少年は、母親の犠牲的な愛によつて大きくなりました。もし彼に、日本の悪口をいふものがあらば、顔を赤くして怒つたであらうが、また、彼の母について、何か批評するものがあつたら、彼は、直に躍りかかつてその者を打ち懲らさずには置かなかつたでせう。それ程、母は彼にとつて祖国の如く貴く、神聖で、関係は宿命で、絶対なものでありました。
>
> 「母は祖国の如し」（「少国民文化」昭和一八年八月）

ここでは、母の偉大さ、神聖さ、あるいは母子関係の宿命性が、祖国日本のそれと、オーバーラップさせられている。執筆時期はやや遡るが、この、母＝祖国の観念は、童話「頸輪」の母犬にも、図式通り形象化されており、両者を一連なりに崇める、未明の着想の反復性が確認できよう。

当号の「少国民文化」の特集は「戦ふ日本母性」であり、右記の文章はその巻頭へ掲載されたものだ。未明以下、高須芳次郎「日本母性の伝統」、石井庄二「たらちねの母」、暉峻義等「母の勤労」、竹内てるよ「母も戦ふ」、今井邦子「母性賛歌」、岡不可止「松陰の母」、佐藤得二「母に寄せて」といった、詩・歌・評論が載せられている。紙幅の都合上、とてもすべてを紹介するわけにはいかないが、これらの論考が、単純な母性の称揚に留まらない、国策利用的な視点（暉峻「母の勤労としての子女の陶冶こそは、秀れたる科学技術、創意と工夫の原動力である」／佐藤「それ（家族国家の実現――引用者注）に当つて先づ打破すべきは母性の狭い愛情である。その一家族にしか行亘らぬ差別的愛情を、せめて隣組の十数家族に平等に行交はせる事である」）を有していた点は注意が必要だろう。

また、同時期には、日本文学報国会と読売新聞社の提携による「日本の母」顕彰運動が、誌面化（「読売新聞」昭和一七年九月九日～一〇月三一日）・書籍化（『日本の母』春陽堂、昭和一八年四月）されてもいた[19]。少文協も後援団体の一つで、加藤武雄・坪田譲二・坪井栄ら、文学部会所属の作家を派遣している。「母は祖国の如し」は、「銃後の母」のあり方が焦点化する、このような時局と軌を一にした、

母性敬仰のテキストであると言える。

「少国民文学」は少文協文学部会の機関誌。直接の編集は、吉田甲子太郎と二反長半が務めた。昭和一八年五月から七月までの間、計三号刊行され、その後「少国民文化」へ統合されている[20]。東苑書房の雑誌「学芸少国民」の編集権を譲り受け、改名の上、発行したものであるため、発行所は少文協ではなく東苑書房だった。部会誌という外郭性もあり、「少国民文化」と比べて、「編集上のいくらかの気軽さ」（滑川道夫「「少国民文学」の性格」『少国民文学7』エムティ出版、平成三年六月）はあったらしい。未明は同誌の六月号へ、感想「何故新人に至嘱するか」を寄稿している。

「何故新人に至嘱するか」は、新人童話作家への期待を記した一文だ。巻頭言のため、文章は短い（引用は全文ではない）。

> 今の子供達が、ものに対する見方、考へ方が、全く新となつた時に、東亜新秩序の建設も、昭和維新も、真に達成されるのである。そして、ここに熱き意を致すものこそ、今の新人作家達でなければならぬと私は深く信ずる。なぜなら、新人等が、少国民文学の領野に来り、蹶起するのは、かかる高遠な理想があつてからであらう。今迄の多くの作家達が金のためにもしくは名誉のために、筆を採りつつあつたのが、一に愛国心の迸りから書くところに、その貴さがあるのである。
>
> 「何故新人に至嘱するか」（「少国民文学」昭和一八年六月）

ここで未明は、新人作家が筆を取る動機は、「東亜新秩序の建設」「昭和維新」という「高遠な理想」ゆえ、すなわち「愛国心の迸りから」であると決めつけている。そうでない作家の存在を、言外に否定しているわけだ。吉田の「文学部会の雑誌のこと」（「少国民文化協会報」昭和一八年二月一五日）によれば、同誌発行の狙いは「新人のための修錬道場」をつくることにあった。未明は巻頭言の場で、かかる「道場」の方針を、高らかに宣明していたと言える[21]。

「日本少国民文化協会報」は、少文協の会報。昭和一七年一一月から同一九年二月までの間、計一四号発行された。この内、未明は昭和一八年一月一五日号に、感想「童話精神の昂揚」を寄せている。

「童話精神の昂揚」は、戦時下の未明の童話観が露わになっている一文だ。それは次のようなものである。

> 今日私達の信念と努力如何によつては、東亜新秩序の建設が案外早く実現さるものと考へられる。そのためには、国民感情の自然発露である童話が、国内に於ける思想の統一を画するに役立たなければならぬばかりでなく、もつて、東亜全体の人間性に強き紐帯を結ぶ具たらしめなければならぬことも単なる希望ではないのであります。この精神を信念を有するならば、童話文学作家たるもの、現下の自然現象に対して、もつと感情が鋭敏でなければならぬし、国策に対して、殉教者的態度に出なければならぬのであります。
>
> 「童話精神の昂揚」

（「日本少国民文化協会報」昭和一八年一月一五日）

童話が「国内に於ける思想の統一を画するに役立」ち、「東亜全体の人間性に強き紐帯を結ぶ具」たること、言い換えれば、家族国家や「大東亜共栄圏」の実現に資することこそ、未明にとっては重要だった。童話作家は、「国策に対して、殉教者的態度に出なければならぬ」とまで、彼は断じている。「赤い蝋燭と人魚」など、佳作を数多く著した大正一〇年時点の未明――あるいは全盛期かもしれない――にとって、童話とは、作者が子どもの心へ立ち返り、自己の純真な夢を訴える文学形式に他ならなかった[22]。しかし、この段階では一転、「国家」という価値基準が前景化してしまっている。

さて、以上、未明が筆を揮った主要三誌を確認してきたが、少文協には、これらの定期刊行物の他に、協会が編集を担った単行本が別途存在する。すなわち、『九軍神の御霊に捧ぐ　少国民作品集』（童話春秋社、昭和一八年七月）、『少国民詩』（帝国教育会出版部、昭和一九年二月）、『少国民科学』（国民図書刊行会、昭和一九年九月）、『少国民文化論』（国民図書刊行会、昭和二〇年二月）の四冊だ。この内、未明は『少国民文化論』へ、感想「解放戦と発足の決意」を寄稿している。

「解放戦と発足の決意」は、未明の「大東亜戦争」観が刻まれた一文だ。彼は次のような立場から、この戦争を正当化していた。

この度の第二次世界戦争こそは、人類生存の目的に対して、見解を異にする、物心両者、世界観の対立である。故に、その勝敗の如きも、民族の興亡と文化の存滅にかかはる、重大なる結果をもたらすものである。思ふに、国家として、独立、自由の矜持なくんば、何の国家と称し、民族といひ得よう。我が日本は、実にそれ故に東亜後進諸民族のために、これまで搾取と暴戻を恣にしたる、米英の鉄鎖を断ち、永遠にその禍根を絶たんとして立上つたのである。

（「解放戦と発足の決意」『少国民文化論』国民図書刊行会、昭和二〇年二月）

「搾取と暴戻を恣にしたる、米英」に対する「東亜後進諸民族」解放の戦い――それが未明の抱く「大東亜戦争」観である。真珠湾攻撃以来、米英を打倒すべき横暴な支配者と見做す未明のスタンスは一貫していた（「つひに世界史的転換期が来た。人類は長い間、思想に経済に英国の支配下にあつた。この鉄鎖を断ち切る暁は、思ひきり明朗となる。我が国の文化とて、幾十年自己の本領を忘れて米英的だつたことであらう。今日から真に自主的文化の建設が創められなければならぬのである」「自主的文化」「読売新聞」昭和一六年一二月一五日）。この辺りは、次節で検討する、童話「頸輪」の世界観と通底するものがあろう。

行動面では、少文協発足当初から、未明は島崎藤村・北原白秋・佐藤紅緑らと、文学部会の「相談役」を務めた（日本少国民文化協会「役員名簿」昭和一七年六月）。発会式直後に、全国二五都市で開

催された、少国民文化宣揚講演会（昭和一七年三月二一～三〇日）へは、弁士として参加。武井武雄らと、青森・秋田・山形の三県を回っている（「協会の活動」「少国民文化」昭和一七年六月）。同年一〇月二五日の文学部懇親大会では、前述の藤村・白秋・紅緑ら六氏ともに、「先輩功労者」として表彰され、感謝状と記念品の贈呈を受けた。未明は「先輩代表」として、謝辞を述べている（「協会の活動」「少国民文化」昭和一七年一二月）。昭和一九年一〇月二五日には、久留島武彦と「第一回少国民文化功労賞」を受賞。情報局総裁賞と金一〇〇〇円を受け取った（「協会特報」「少国民文化」昭和一九年一一月）。

以上、日本少国民文化協会における、未明の発言と行動の軌跡を辿ってきた。彼は、少文協の定期刊行物全誌（「少国民文化」「少国民文学」「日本少国民文化協会報」）と、協会が編集に携わった単行本『少国民文化論』へ、感想・童話を寄せており、それらはいずれも、「聖戦」を遂行する祖国日本を嘆賞した、時局色の強い内容を持つ。一方、協会での行動は、年齢の問題もあってか、限定的だ。各種表彰は目立つが、少文協内部の実務を、第一線で担っていたわけではない。

三、童話「頸輪」――アジアを統べる母

最後に、議論の俎上へ上げなければならないのは、「少国民文化」創刊号（昭和一七年六月）へ掲載された、童話「頸輪」である。この作品は、小川未明が日本小国民文化協会の出版物へ著した唯一の童話であり、前節で紹介した「解放戦と発足の決意」（『少国民文化論』国民図書刊行会、昭和二〇年二月）と同様、未明の「大東亜戦争」観を露わにしている点で、極めて興味深い内容を持つ。

まずは、書誌を簡単に浚っておこう。本作は初出後、同年一一月発行の童話集『僕はこれからだ』（フタバ書院成光館）へ初収された。しかしその後は、近年小埜祐二の編んだ『小川未明新収童話集』第六巻（日外アソシエーツ、平成二六年三月）へ採録されるまで、全集類を含め、一切活字化されていない。追って論じる通り、「大東亜戦争」を欧米列強からのアジア解放の戦いと位置付ける本作は、戦後の言語空間において、忌避ないし隠蔽の対象となっていたのだろう。

このような事情も関連してか、（児童）文学研究分野における「頸輪」の作品論は、何一つ残されていないのが現状である。管見の範囲では、戦中・戦後、行動をともにした童話作家仲間の菅忠道・関英雄・二反長半と、戦時中「少国民」の側にいた山中恒が、戦後、断片的に回顧・言及しているのみだ。例えば、菅は「未明は、情熱と信念をもって、具象的な童話の言葉で、戦争に奉仕することを自分自身の使命としていた。ことに太平洋戦争の段階では、アジアの解放を願って、聖戦に協力を惜しまなかった。日本少国民文化協会の機関誌「少国民文化」創刊号の「頸輪」には、その「解放戦」への願いが、はげしい激情をこめて、象徴的に描かれていた」（『日本の児童文学』大月書店、昭和三一年四月）と述べ、「聖戦」推進者た

る未明の、アジア解放への「願い」が注入された作品として、本作を読み解いている。

では、その「願い」は、具体的にどのようなかたちで描出されていたのだろうか。それは菅の、「象徴的に描かれていた」という指摘と関わる。本作には、不慮の事故から、首に時計の皮紐を固く結ばれ、発狂寸前の「痩せた小犬」と、「犬殺」と果敢に戦うほど勇猛な「黒色の日本犬」が登場する。両者はそれぞれ別個の犬として登場し、関係は不明なのだが、作品末、主人公・信一（国民学校四年）の弟・武夫（同二年）の情報によって、母子であることが判明する。それを知った信一は、母犬が子犬の皮紐を噛み切るであろうことを予想し、大歓喜した。『日本の児童文学』に直接の記述はないが、菅の言う「象徴」とは、この母子関係に、日本とアジア諸国の関係がアナロジーされているという意味だろう。つまり、母犬が子犬を救うように、皇国日本が、欧米の植民地支配に苦しむアジア各国を解放へ導くという類比だ。

もっとも、このような着想は、菅や私の独創ではない。関・二反長・山中の三人も、ほぼ同種の見立てを行っている[23]。二反長は「きつい頸輪でしめられた犬を大国に侵略されたジャバ、スマトラになぞらえ、これらの民族が自分でその頸輪を断ち切れない運命にあり、その頸輪をたち切ってやる母犬を、日本としてヒユ表現しているのである。私は、氏から直接その意図を聞いて、はじめてうなずいた次第だったが、氏は聖戦と称した日本の侵略（ママ）をそのように信じ切っていたと見えた」（『児童文学の展望』大阪教育図書、昭和四八年八月）と記し、本作には、頸輪で苦しむ子犬＝大国に侵略されるジャワ島・スマトラ島、頸輪を断ち切る母犬＝侵略を止める日本という「ヒユ表現」が存在する旨、指摘している。しかも二反長は、未明から「直接その意図を聞い」たのだそうだ。

だが、これらの先行論は、主旨には同意できるものの、具体的なテキスト分析が一切行われていない欠点を持つ。つまり、おおむね総論的で、実際、どのようなアナロジーが、どのような思想的背景のもと、働いているのか、定かでないのだ。

よって本論では、先行論を踏まえつつ、この点を掘り下げたい。以下、子犬の影に関する叙述である。

> ちやうど、また道の乾いた土の上に映る、哀れな動く灰色の影は、青々とした太洋に横はる、ジヤバ、スマトラの形によく似てゐました。これ等の島々は、寄生したオランダや、イギリスや、アメリカのために、生血を吸ひ取られて、はかなくかげろふの如く、渺茫とした海原の裡に、消えかからうとしてゐるのでした。この民族とこの小犬は、共に同じ運命であることを信一に思はせたのでした。「蘭印は、自力で、鉄の箍を切断できないし、小犬は、自分で、頸に巻きついた、皮紐を噛み切ることが出来ないのだ」

子犬の影は、オランダ・イギリス・アメリカに「生血を吸」われる、ジャワ島・スマトラ島といった島々の形に「よく似て」おり、子犬

とこれら南洋諸島の民族は「共に同じ運命」なのであった。括弧内は信一の心中の声だが、ここでも彼は、「自分で、頸に巻きついた、皮紐を噛み切ることが出来ない」子犬と、「自力で、鉄の箍を切断できない」オランダ領東インドを、同一視している。

一方、母犬について信一は、作品末、「アジヤの鉄環を断ち切つたのは、アジアのお母さんである日本だ！　その母犬は、きつと皮紐を噛み切つてやるだらう」と独白し、「皮紐を噛み切」る母犬と、「アジヤの鉄環を断ち切」る「アジアのお母さん」日本のイメージを、二重写しにしている。

犬の母子へ、このようなアジアの指導・被指導関係を仮託する発想の基底にあるものは何か。言うまでもなく、それは、「大東亜戦争」の大義である、「大東亜共栄圏」の理念に他ならない。時の東条英機首相が、昭和一七年一月の施政方針演説で、「大東亜共栄圏建設の根本方針は、実に肇国の大精神に淵源するものでありまして、大東亜の各国家及び各民族をして各々其の処を得しめ、帝国を核心とする道義に基く共存共栄の秩序を確立せんとするに在る」（『大東亜戦争に直面して　東条英機首相演説集』改造社、昭和一七年二月、傍点引用者）と断じ、「帝国」を中核とする、アジアの再編成を謳っていた史実を思い起こされたい[24]。

本作冒頭には、「いままで、いぢめられてゐた（アジアの――引用者注）国々は、日本を有難がつて、喜んでゐるだらうな」という信一の発話に対して、次のように応答する姉の姿が捉えられている。

「さうですとも、自分達の国を取返してもらつたんですもの、急にのびのびと手足が伸ばされて夢かと思つてゐるにちがひありません。全く生れ変つたやうに、生々としたでせうね。それも、同じアジヤ人である日本のお蔭です。長い間アジヤが英米に苦しめられたのを、日本は我慢に我慢してゐたが、つひに勘忍袋の緒が切れて起ち上つたからです。そのはち切れた勢が、このやうに大陸の方々へ飛火したのですから、もう英米だつて手がつけられないでせう。これから、ぐんぐんと反対にアジヤは成長して、新しい人類の誇りとなるやうな歴史を創り出すのです」

と、姉さんは、頬を美しく紅くしながら、頼母しさうに、弟をご覧になりました。

ここで姉は、「いままで、いぢめられてゐた」アジアの国々に「自分達の国を取返して」あげる存在、そしてアジアをかつてない「成長」へ導く存在として、日本を位置づけ、誇っている。前述の日本＝「アジアのお母さん」という定義と同様、ここにも、日本をアジアの長と見做す「大東亜共栄圏」のイデオロギーが露呈していよう。そして、このイデオロギーは、一人未明のみならず、「少国民文化」創刊号という言語空間に横溢していた[25]。

「聖戦」の大義に感応し、頬を紅潮させていたのは、姉ではない。当の未明自身であったのだ。「頸輪」発表の前月、未明は座談会で、次のような発言を行っている。

然し今日、日本が与へられた東亜共栄圏の建設といふものは、これは民族が総がかりでもつて作らなければならぬ一つの理想だと思ひます。それは東亜共栄圏をつくる一つの理想、何故にアジヤといふものが互に提携して行かなければならないか、それからアジヤにはまた共通の理念といふものがありますが、それからこのやはり日本が今このアジヤ共栄圏を作るために、どれだけの苦しみを為しつつあるかといふこと、さういふことが、僕は各作家の立場によつて深さが違つて来ると思ひます。兎に角まあアジヤの共栄圏を作るといふ課題があり、それを実現せんとすることは我々の使命とされて居る。総ての教育は、その同じ方向へ、同じ目的に向つて進むべきものと思ひます。

「小川未明先生に訊く　創作童話の座談会」
（「新児童文化」昭和一七年五月）

「大東亜共栄圏」の正義性を、揺るぎなく確信する未明[26]。未明にとって、「大東亜共栄圏」とは、「民族が総がかりでもつて作らなければならぬ一つの理想」であり、「総ての教育は、その同じ方向へ、同じ目的に向つて進むべきもの」なのであった。

したがって、教化の対象は、当然児童にも向かっている。前述の童話集『僕はこれからだ』の序文「子供達に」では、「アジア民族」を苦しめる米英への憎悪を煽り、国家奉仕を指嗾する未明の姿が確認できるし（「いま、日本が先頭に立つて、暴慢な英米と戦ひ、世界秩序の建直しに邁進してゐることをご存じでせう。もし、さうしなかつたならば、私達のアジア民族は、彼等のために苦しめられて、終には身動きすら出来なくなる運命にあつたのです。さう聞くならば皆さんは、歯ぎしりをして、早く大きくなつて、お国のためにつくしたいとは考へませんか」）、童話「太平洋」（「少国民の友」昭和一九年四月）の語り手は、「アジアの国々」を植民地支配する米英を「おそるべき悪魔」とまでラベリングしている（「大東亜戦争は、米英にくるしめられてゐる、アジアの国々を、日本が助けて、そのおそるべき悪魔の手からすくひ出すためにおこつたものです」）。

当時「少国民」だった山中が、「未明はこの時期、如何なる思い違いや、誤認があったにせよ、疑いもなく天皇制ファシストの走狗だったのである」（『撃チテシ止マム』辺境社、昭和五二年三月）と手厳しく指弾するのも、あるいは仕方がないことかもしれない。

かくして、童話「頸輪」の子犬と母犬には、欧米に屈従を強いられるアジアと、その解放者たる日本の姿が、存分に仮託されていた。その露骨とさえ言える隠喩は、未明の「大東亜共栄圏」への心酔が、もたらした結果に他ならない。「少国民文化」創刊号という磁場で、未明は「大東亜戦争」の大義をためらいもなく鼓吹し、国策協力者の相貌を露わにしていたのである。

（ますい　まこと・言語文学専攻）

注

1　もちろん、「不毛」とは、相対的に「実りが貧しい」という意味で、先

行論が皆無であるわけではない。例えば、続橋達雄は「未明童話集『日本の子供』の一考察」（「野州国文学」昭和五二年一二月）、「未明童話集『夜の進軍喇叭』序論」（「野州国文学」昭和五四年一一月）、「未明童話集『赤土へ来る子供たち』考」（「野州国文学」昭和五六年一二月）で、日中戦争期の未明の童話集を分析している。

2 小埜裕二は、「概説」（『小川未明全童話』日外アソシエーツ、平成二四年一二月）で、未明の作家生活の分水嶺を、大正一五年の「童話作家宣言」に置き、「〈童話作家宣言〉以後の未明の童話は、それ以前の童話に比べ、あまり評価されてこなかった」「結局、後半期の未明童話は、十分吟味されることもないまま現在まで放置されてきた」と、「宣言」以降の作品の評価の低さ、注目の少なさを指摘している。

3 山中恒は、「日本の児童文学最高の作家とされてきた未明の戦時下の言動は「見てはならないもの」とされたのである」（『戦時児童文学論』大月書店、平成二二年一一月）と語っている。事実、戦後刊行された『定本小川未明童話全集』全一六巻（講談社、昭和五一年一一月～同五三年二月）や『定本小川未明小説全集』全六巻（講談社、昭和五四年四～一〇月）には、昭和期の戦争協力的な童話・感想類が、ほとんど掲載されていない。なお、この時期の未明の言動については、拙稿「転向者・小川未明（下）――階級闘争から八紘一宇へ」（「日本文学文化」平成二九年二月）で、論究を試みた。

4 未明作品の書誌は、これまで前記『童話全集』一四巻、『小説全集』六巻所収の作品年表がもっとも充実していたが、感想類を扱った『小説全集』の年表は、とりわけ限界があった。

5 小埜祐二は、前記『童話全集』未収録童話四五四篇を収録した、『小川未明新収童話集』全六巻（日外アソシエーツ、平成二六年一～三月）も刊行しており、近年、未明研究は、新たな局面へ突入していると言えよう。

6 山本明「一五年戦争末期の雑誌（三）少国民文化協会の出版物」（「評論・社会科学」昭和六〇年五月）、佐藤広美「児童文化政策と教育科学」（「東京都立大学人文学報」平成五年三月）、浅岡靖央『児童文化とは何であったか』（つなん出版、平成二六年七月）参照。

7 浅岡が語る「指示要綱」の「良識的」な面については、鳥越信も「要綱の狙いが最初、主として俗悪な赤本的出版物に向けられていたこともあって、この統制には一面革新的な側面も含まれていた」（「日本少国民文化協会について」「文学」昭和三六年八月）と述べ、出版物の改善措置として機能した点を、一定評価している。

8 佐伯は、『少国民文化をめぐって』（日本出版社、昭和一八年一一月）で、「わたしは厚かましくも、紹介状も持たないで、名刺一枚でこれらの先生方を訪ねて廻ったものである。事情を説明すると諸先生は、喜んで承諾して下さつて、積極的に協力を申し出て下さつた」と追想し、答申を依頼した折、未明ら識者が好意的な反応だった由、書き留めている。

9 浅岡靖央は、「戦争政策としての少国民文化」（「子どもの文化」平成二二年七・八月）で、「ただ、けっして忘れてならないことが一つある。少国民文化政策は、児童読物統制以来、国が独善的・強権的に推し進めたものではなく、官民合同によって立案され実施されたという事実である」と語り、「指示要綱」に端を発する、少国民文化政策の官民一体性を強調している。

10 菅忠道は、『日本の児童文学』（大月書店、昭和三一年四月）で、内務省の処分が「俗悪児童読物」の進出を抑える一方、「芸術的な児童文学」の復興をもたらしたとする見解を示している。「この措置によって、俗悪児童読物の横行はおさえられ、良心的な文化性の高いものに進出の道が与えられたことは確かである。冬の季節にたえてきた芸術的な児童文学に、ようやく陽春がめぐってきたと思われた。童話作家のなかには、ストックをはたいても追いつかぬほど、インフレ景気に恵まれた人も出るありさまだった」

11 浅岡靖央「児童文化から少国民文化へ」（「国際児童文学館紀要」平成一九年三月）は、「日本児童文化協会」を「日本少国民文化協会」へ名称変更するよう進言したのは、山本有三であるという立場を前提に、その発言の時期を探った論考である。浅岡は、「八月一八日における山本の発言には「少国民」という言葉は含まれていなかったと考える。（中略）その上で山本は、その後に開かれた起草委員会において、「児童」に代えて、「少国民」としたい旨の発言を行ったと推測する」と結論付けているが、八月一八日の創立準備委員会の様子を報じた翌日の新聞記事には、「山本有三委員より当協会は設立の趣旨から見て〝児童〟といふより〝少国民文化協会〟とした方がよく、その方が子供に次の国民たるの覚悟を持たせる」（「児童文化協会発足」「朝日新聞」昭和一六年八月一九日）云々といった記述がある。したがって、浅岡の結論は誤りだろう。

12 もちろん、二反長の記す未明の発話が、一言一句、当時の正確な再現であるとは私は思わない。記憶の減衰や作家的脚色は、当然あると考えられる。しかし、同時代の諸資料を勘案すると、未明が児童文化団体の統合に「大賛成」していたとする論旨は、間違いなさそうだ。

13 「銀座三越に少国民室」（「読売新聞」昭和一七年二月六日）、鳥越信「日本少国民文化協会について」（「文学」昭和三六年八月）、二反長半『児童文学の展望』（大阪教育図書、昭和四八年八月）参照。

14 少文協の「定款」第四条には、協会の事業として「少国民文化財ノ生産、配給ニ関スル企画指導並ニ斡旋」「少国民文化財生産者ノ再教育並ニ養成指導」が、定められている。

15 なお、少文協は「少国民文化財」の制作を、直接的には行っていないが、唯一の例外に、情報局と連携してつくった「愛国いろはかるた」がある。今、任意の数枚を挙げれば、い＝「伊勢の神風敵国降伏」、ほ＝「ほまれは高し九軍神」、か＝「輝く胸の傷痍記章」（「日本少国民文化協会制定　愛国いろはかるた」「少国民文化」昭和一八年一〇月）といった具合だ。

16 雑誌の新規発刊は、当時法律上、許されていなかったため、「少国民文化」は「新児童文化」（有光社）の発行権を献納させて、創刊された。同誌編集長の巽聖歌は、「佐伯氏に頼まれたんじゃあ、いやとはいえなかった。惜しかったが仕方がない」（関英雄『体験的児童文学史　後編』理論社、昭和五九年一二月）と、諦めの気持ちだったという。

17 佐伯は、「否定論者の中には、「少国民文化」の売行きの香ばしくない点を誇大に指摘してゐる向きもあるやうである。（中略）「少国民文化」のやうな性格を有する雑誌を発行して、最初から採算を見込むなどははなはだしい認識不足である。ある点まで採算を無視しなければ、このやうな雑誌はやれるものではない」と、弁解的な口調ながら、同誌の販売実績が今一つな点を認めている。

18 本稿で触れる機会はなかったが、山本和夫「小川未明論」が、「少国民文化」（昭和一八年一〇・一二月）へ、二回にわたって連載されている事実を、付記しておきたい。

19 国家奉仕の見地から、母性を称揚する昭和一八年の出版物としては、他に、山口愛川『日本の母』（六合書院、昭和一八年二月）、進藤喜美『日本の母』（富文館、昭和一八年四月）がある。

20 わずか三号で消えた「少国民文学」だが、後に一号だけ復活を遂げている。昭和一九年一一月に、みたみ出版株式会社から発行された「少国民文学」だ。これは、文学部会会員の野長瀬正夫が編集を務めた雑誌で、情報局文芸課長の井上司朗や佐伯郁郎も文章を寄せている。滑川道夫は、本誌は編集責任・発行元が異なるため「復刊ではなく新雑誌と見るべき」だが、執筆陣・創刊目的（新人育成）の共通性という点で、「明らかに前誌の系譜に位置付けられる性格をもっている」（「「少国民文学」の性格」『少国民文学7』エムティ出版、平成三年六月）と分析している。

21 巻頭言で新人全体に物申せるほど、この時期、未明は童話界の大家と

して君臨していた。巽聖歌は、「僕はかういふことを言つてよいかどうかしりませんが、今の一部の人達の童話が悪くなつたのは、小川先生のせゐと思ふんです。（笑声）というのは、先生の亜流が多いからです。小川先生はそれだけの影響力をもつたといふか、気力をもつ作家です。小川先生の存在は厳然たるものです」（「小川未明先生に訊く創作童話の座談会」「新児童文化」昭和一七年五月）と、その影響力の大きさを指摘している。また、『現代童話四十三人集』（フタバ書院、昭和一八年一二月）は、未明の還暦祝いに、友人・後輩・門弟らが編んだ童話集だが、戦時中にこのような本が出されること自体、極めて異例だろう。

22 小川未明「序」（『赤い蝋燭と人魚』天佑社、大正一〇年五月）、「私が童話を書く時の心持」（「早稲田文学」大正一〇年六月）参照。なお、大正一〇年時の未明の童話観については、拙稿「小川未明「時計のない村」論――「原始時代」への夢」（「日本文学文化」投稿中）で言及した。

23 関英雄『体験的児童文学史　後編』（理論社、昭和五九年一二月）、山中恒『撃チテシ止マム』（辺境社、昭和五二年三月）、『戦時児童文学論』（大月書店、平成二二年一一月）参照。

24 東条の「大東亜共栄圏」観について、栄沢幸二は「東条首相の、各民族にその処ないし所を得しめるという秩序原理は、事実上、天皇制国家の正統イデオロギーともいうべき、身分的な上下の君臣・父子・兄弟の関係を規律する、上の下のものに対する指導・愛護と、下の上のものに対する信従・畏敬の縦の道徳からなる秩序原理のことであり、これを親の国日本と共栄圏内の諸民族・諸国家との関係を律する原理にまで拡大・適用したものでしかなかった。そこに支配していたのは、指導と被指導や愛護と畏敬・信従の支配原理であった。またアジアの同胞としての身内意識やこれに対する肉親の情は、この原理を支える心理的な基盤になっていたように思われる」（『「大東亜共栄圏」の思想』講談社現代新書、平成七年一二月）と述べ、国内の秩序意識（家族国家観）を、アジア諸国へ同心円的に拡大したものだとする見方を示している。

25 小野俊一「日本少国民文化協会の使命」、東条英機「日本少国民文化協会の発足を祝す」、奥村喜和男「民族、国家発展の基底」参照。また、雑誌冒頭の口絵では、「スマトラ」「バタビア」「ビルマ」の住民から歓迎を受ける「皇軍兵士」の様子が、「聖戦五ヵ月、我が南方占領地の諸地域には早くも復讐の鍬建設の斧が原住民の献身的協力の下に逞ましく揮はれてゐる」「激烈な戦火の下でも皇軍の将兵は戦に強いばかりでなく子供とすぐ仲良しになり住民の限りない信頼を浴びてゐる」といったキャプションとともに紹介されている。

26 例えば未明は、「児童出版の使命」（「出版普及」昭和一七年三月）で、「曩古の大理想たる東亜共栄圏の建設は、目的とするところ、人類の解放であり、徳化であるところ、正にその行動は、正義に立脚するといふことが出来る」と断言している。また、未明の次女・岡上鈴江は、『父小川未明』（新評論、昭和四五年五月）で、戦中、「大東亜共栄圏」の理念に共鳴する未明の様子を、次のように振り返っている。「自分が生まれた郷土、祖国を愛する念が人一倍強かった父は、また純情で単純で信じやすい性格だったから、「アジアの諸民族は欧米とは本質的に異なる特性を持っている。欧米の植民地支配下で苦しむアジアの弱小国をすくい団結して新しいアジアをきづこう」という東亜共栄圏の理念がとなえられると、強い関心をもってその記事をのせた新聞に見入った。「おとうさんはほんとうに信じていられたんだよ。小さな国が大きな強い国に支配され、しぼられているけれど、どんな民族もその国はその民族の手で治められるべきだ。日本はそれに力をかしてやろうとしているのだっていわれてねえ」と、母は後年、私に語ってくれた」